



消えゆく景色の中で、見つけた答え。
目指すのは、商いをする人にも、
住まう人にも居心地の良いまちへ。

新大門商店街 しんおおもんしょうてんがい

JR名古屋駅西口から徒歩約15分。かつて中村遊郭が存在し、その跡地の約500m四方が新大門商店街の区域となっています。平成初期頃まではにぎわいを見せましたが、2000年代に入ると勢いは一気に衰え、200店舗ほどあった商店街振興組合の加盟店は40店舗ほどに。時代を彩った歴史的な遊郭建築物もその多くがマンションへと姿を変えました。まちの景色が移り変わる中でも、大切にしてきた人と人の絆。新旧一体となって商店街再生に取り組んだ成果が、実を結ぼうとしています。



事例集は「愛知県商業流通課webページ」でもご覧いただけます



SHINOMOMOSHOTENGA



大門には映画館が3つもあった!



商店街としての安定期とは新陳代謝していない停滞期でもあった



1923 中村遊郭建設

大須にあった遊郭(旭郭)を移転するため、元々田畑だった場所に中村遊郭が建設された。大門のまちは中村遊郭建設時につくられ、昭和10年頃中村遊郭の最盛期を迎えるが、戦後商売は下降の一途をたどっていった。



2023年に中村遊郭完成から100周年を迎えた。当時の遊郭建築物は近年取り壊されなくなってしまった
左:料理旅館大観荘、中:松岡、右:稲本(写真提供:新大門商店街振興組合)

古い建物がなくなるのはさみしいが、まちは新陳代謝して発展していくもの

1945頃 新大門商店街振興組合発足

戦後、発展会が集まって「新大門商店街振興組合」が発足。

最盛期には200店舗以上が加盟していたが現在は約40店舗となった

1974 「大門夏祭り」毎年開催

大門の夏の風物詩である納涼夏祭りが、新大門商店街振興組合主催で始まった。

1999 「エコ商店街」活動

商店街の活動が活発で、リサイクルステーションの運営やエココインの配布など、様々な活動を行っていた。

2011年東日本大震災後、加納さんがぎもの美濃寺を継ぐために新大門に帰る。この地に根を張ると思ったときに覚悟が決まった

2015 ターニングポイント OMON FES

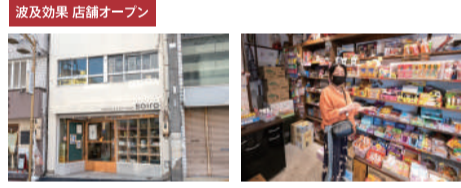
2014年で終わった「大門夏祭り」を引き継ぎ、大門まちづくり友の会が「OMON FES」を開催。



若い者が集まって活動することに反感を抱く古参ともコミュニケーションを取り人間関係をつくることで、新しい活動が受け入れられていった(写真提供:新大門商店街振興組合)

2020 ターニングポイント ナゴヤ商店街オープン参加

DIY・リノベーションを行う会社「soiro living」が、アップサイクル&DIYショップ「soiro building」をオープン



soiro building (2021) みんなの駄菓子屋(仮) (2021) / 大門横丁にあるよ



2021 太閤秀吉功路



豊臣秀吉や加藤清正の生誕地として、武將にゆかりのある地名や史跡、歴史的・文化的な資源が点在する中村区。名古屋駅から中村公園までのルートに「太閤秀吉功路人生大出世夢街道」と命名しモニュメントを設置。

2022 取組成果 「Teapick」オープン



ナゴヤ商店街オープンにより、紅茶専門店「Teapick」が開業。

波及効果 イベント実施 大門軒先マルシェ



地域の祭り「OMON FES」と同時開催。翌年は中村区と共催する交流事業として単独開催。
商店街振興組合、大門まちづくり友の会に続いて、新しく立ち上がったメンバーで開催。商店街が歩行者天国になった。それぞれが担う多様な活動があるのが大門らしさ! (写真提供:新大門商店街振興組合)

閉店する店舗が3店舗、新規開業が0だったのが、閉店3店舗は変わらずなくても、開店が1、2店舗と衰退がゆるやかになってきた



今後の課題

- ・新店舗にまちの起爆剤を求めすぎず、全体で底上げを目指す
- ・イベントは人が集まるが日常的に商店街に来てもらえるよう商店街を知ってもらいたい
- ・活動の手を広げすぎると負担になるので仲間を増やしていきたい

地域に住む多様な人たちにとって、住みやすいまちにしていきたい。





中村遊郭

1923年4月に開業した日本最大級の遊郭。東京の吉原を模した造りが特徴的で、外周を幅一間の堀で囲み、四隅の道を斜めにすることで、外部から中の様子をのぞくことができないようにしていました。この堀の跡地は道路となり、町境として形を残しています。一方で、中村遊廓のシンボルともいえた歴史的な建築物は徐々に取り壊され、跡地にはマンションや病院、スーパーマーケットなどが建設されています。

「大門」は中村遊廓建設時につくられたまちで、中村遊廓の繁栄とともに発展したものの昭和中期以降は下降の一途に。まちの賑わいを取り戻そうと、新大門商店街をはじめ、街ぐるみで活性化への取り組みが続けられています。



名古屋駅に近いこともあって近年マンション建設が進み新住人が増えている。外国人も多く、多種多様な人が住む「多様性のまち」



多様性と可能性のあるまち、新大門商店街

>> 加納さん

大門は1923年に中村遊廓が誕生したのを機にまちが開かれていきました。商店街は戦後に発展していき、新大門商店街としての歴史は80年弱くらいになりますね。もちろんもっと前からあるお店もあって、「きもの美濃幸」もその一つです。

ただ、僕自身は実は大門育ちではないんです。「きもの美濃幸」は母方の実家で、学生時代に住んだのは4年くらい。それから進学や就職でずっと離れていて、2011年に跡継ぎとして大門に戻ってきたので、トータルで15年ほど大門で暮らしています。

商店街としては昭和中期から平成に入るくらいまではもっとにぎわいがあって、商店街振興組合には200店くらい加盟していたけれど、今は40店くらいかな。他の商店街も似たようなところが多いと思うけど、大型ショッピングモールが増えたり、生活様式が変化したりして2000年代を底に一気に落ち込みましたね。今はV字回復とは言えないけれど、松本くんのようにまちづくりに関わる人も増えてきて、少しずつ下げ幅がゆるやかになっている感じです。

大門というまちは花街としての歴史もあり、かつては遊廓建築もたくさん残っていました。そうした「昭和レトロ」な風景を目当てに外から来る人もいたけれど、今はほとんど取り壊されてあまり残っていません。ある人に言われたんですが「まちは新陳代謝するもの」なんです。

大門にあった貴重な建築物や風景が失われるのは惜しいとも思いますが、循環することがまちの発展にも繋がっていくはずですよ。なくなるものに目を向けても仕方がないので、自分たちが何をしていくかが大事だと思います。

あと、もう少し広いエリアで言うと、大門は名古屋駅から西に1.5kmほどの場所にありますが、駅西のエリアは昔から外国籍の人も住んでいて、多様性もある。子どもたちを見ているとたくましさを感じますね。

>> 松本さん

僕が新大門商店街に来たのは、名古屋市の商店街商業機能再生モデル事業「ナゴヤ商店街オープン」がきっかけです。ものづくりの拠点とコミュニティを作りたいと考えていたときにナゴダバンクの藤田さんに紹介してもらって、ハードとしての面白さや昭和の雰囲気が残っているインパクトを感じました。名駅から近いという立地のポテンシャルもありますね。

最初は別のエリアも検討していたんですが、既に成熟している場所よりも、これから盛り上がる場所で核になることに可能性を感じて新大門商店街にDIY・リノベーションなどを行う「soiro living」を開くことにしました。コミュニティ作りにおいては、1から始めるのではなくて商店街のようにすでに人の繋がりができている場所でスタートすることにも可能性を感じました。



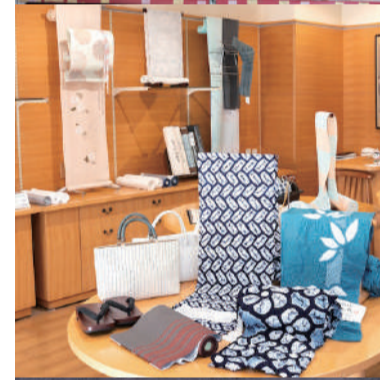
ハレの日だけじゃない
日常の大門も盛り上げたい

松本啓太さん
soiro living (ソイロリビング) 店主



大門は人情味のある
地域の関係性が濃いまち

加納栄志さん
きもの美濃幸店主兼商店街理事長





一朝一夕では生まれたい、関係性を築くことの大切さ

>>加納さん

僕たちは「大門まちづくり友の会」で「OMON FES」という地域の祭りをやっていたんだけど、一部の人は「勝手に新しいことをやっている」と思われてしまうこともあったし、最初のうちは意見がぶつかりあったこともありました。でも、口だけではダメで、実際に自分がやってみてわかることもあると思っています。僕自身も母から引き継いで商店街組合の理事としての活動もするようになりました。

実際に動いてみると、元からいる人たちが言っていることが理解できるようになるんです。だから、自分でやってみることは大切ですね。

あとは、日頃から関係性を築いていくことで、何かを始めるときにも「あの人が言うならいいよ」となって、すんなり通ることも多い。それくらい人間関係は大切です。合意形成が取れていると思っていただけ、実際は一部の主体的な人以外の意見が反映されていなかった、なんてこともありますから。結局、人間関係ができていないからお互いを良く思えないんですね。

実際はそれぞれの組織で100%の融和を実現するのは難しいと思うけど、完全に融合しなくても互いに制限せずによければいいと思います。全てを一緒にやるのが難しくても、お互いの活動を知って協力できればいいですね。

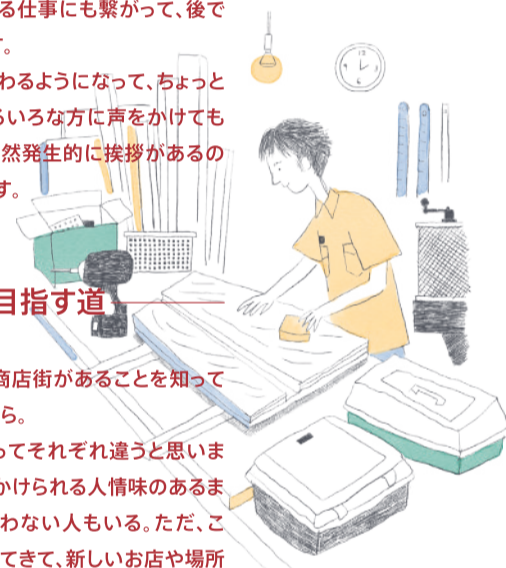
>>松本さん

僕自身は、実はまちづくりをするつもりはもともとなかったんです。でも、加納さんとお話していく中で、のめりこんでまちのことを考えるようになっていきましたね。ものづくりの考え方をまちづくりにも当てはめてスライドしている部分もあります。

この3年間で、商店街の店内に出店するスタイルの「大門軒先マルシェ」や、日常の大門の魅力を発信する「大門びより」などを開催する実行委員会のメンバーとしても活動してきました。去年(2023年)は大門100周年記念の花魁道中の開催のために、地域のスーパーの駐車場を借りたり、行政と連携して道路を封鎖したりと、活動の幅が広がりましたね。

よく「なんでそこまでやるの?」って聞かれるけど、楽しんでやっているから身は削っていても無理はしていないんです。まちづくりも「soiro living」の事業のひとつだと思ってやっている部分もあって、活動を続けていくことで商店街やまちづくりに関する仕事にも繋がって、後でリターンが出ることもあります。

それに大門でまちづくりに関わらなくなって、ちょっと商店街を歩いただけでもいろいろな方に声をかけてもらえるようにもなりました。自然発生的に接点があるのは良いまちだなと感じています。



地域の人が使いやすく活気のある商店街へ。新大門商店街が目指す道

>>松本さん

この辺りは古くなった建物が取り壊しになり、どんどん新しいマンションが増えてきています。住民は増えてはいるはずだけど、新大門商店街のことを知らない人も多いのではないかと思います。マンションに住んで朝早くから夜遅くまで仕事に行っている人は、商店街のお店がオープンしている時間帯にはなかなか立ち寄れないですね。実際にこの辺りに数年間住んでいて、地域のスーパーにしか行ったことがないという人もいました。そういった課題も踏まえて、地域の方にももっと新大門商店街に足を運んでもらえるようにしたいというのがあります。少しずつではありますが、大門軒先マルシェや大門びよりなどのイベントをきっかけに「近くで何かやっているから行ってみようか」ということで地元の方が来てくれているという体感があります。

大門の良さは人と人の距離感。商いをする人にも、住民にとっても心地よい場所であればと思います。歩くだけで声をかけられる文化が残っているので、ウェットな関係性が心地よいと感じる人や、大門でこだわって何かしたい!という人と出会えたらうれしいですね。

とはいえ、新店ができることだけに商店街として期待しすぎるのも荷が重いですし、やはり今あるお店全体を底上げしていくことが大事かなと考えています。人の繋がりでどうにかなることも多いので、今後も活動を通じて地域の関係性を築いていければとも思っています。

>>加納さん

僕が目指したいと思うのは地域に住んでいる人にとって便利な商店街ですね。使い勝手が良い商店街には活

気が戻らと思うので、まずは商店街があることを知ってもらって、お店に来てもらえたら。

「良いまち」の定義は人によってそれぞれ違うと思います。大門はいろんな人に声をかけられる人情味のあるまちなので、それが合う人も合わない人もいます。ただ、これまでのいろいろなお店を見てきて、新しいお店や場所を続けていくには、やはり地域や商店街と関わりを持つとしないと難しいんじゃないかとも思います。商店街振興組合としてはもっとオープンに門戸を開いていきたいですね。

自分自身は脱サラをして跡継ぎになるぞ!ということで覚悟をもって大門にやってきたわけですが、今となってはサラリーマンでも、ここでお店や商店街に関わって生きていくのもどちらも大変なのは変わらないかな。でも、自分が根を下ろす場所をより良くしていきたいという気持ちは強いんです。まち全体がひとつの会社・組織のような感覚があって、自分が所属する場所を良くしていきたいという思いもありますね。

まだまだ商店街全体として全盛期のように活気があるわけではありませんが、まちづくりに積極的に関わっているメンバーも10人ほどいます。みんな大門でお店をやっていたり、お店をもっていなくても中村区にゆかりのある人たちばかりで、コンサルタントのような外部のプレーンはいません。商店街振興組合以外のチームもそれぞれ主体的に動いているので、自分も前からいた地域の人にしてもらったように、これからは新しい歯車になって頑張ってくれる人のために動けるようになったらと思いますね。

